ぼくが、この話しを、読んで、一番ミイラは、りくらくすりでも高価でやりとりをしていたのが、おどろきました。ぼくからしたら、ミイラはきもちわるい、おばけのような物だからです。

もしぼくが、ミイラだったら、ぜったいに、こなごなにされて、くすりとして、つかわれたくありません。なぜなら、りみのだけこと に、つかわれて、りみのだらのがいやだからです。

ぼくの家では、妹が、お父さんを、ごはんだよーと、よびにいってよくたのんでいます。お父さんが、ねているときは、妹を、お父さんの、にまきこまれないように、なっています。ぼくは、ぼくもねたいなと、思いました。

ぼくは、とてもミイラが、かわいそうに思いました。さ、と、その人は、天ごしで、なりとしるて、思いよします。ぼくは、心の中で、きけんなのにどうして行こうと、つよ、あるのかな、と、思いました。